

2 歌は世につれ世は歌につれ

—現代の歌詞と古典の和歌を比較してみる—

1 ユニットプランナー

重要概念	関連概念	グローバルな文脈
ものの見方	テーマ 自己表現	空間的・時間的位置づけ
探究テーマ		
テーマを表現するために作者が選択したアイテムには、その時代・場所の人々のものの見方が反映されている。		
探究の問い		
事実的問い：現代の歌詞にはどのようなテーマに関わるアイテムが使われているか。 古典の和歌の中でのテーマに関わるアイテムにはどのようなものがあるか。 概念的問い：作品に使われるアイテムは、どのような働きをしているのか。 作品はどのようにその時代・場所の人々のものの見方を表すのか。 議論的問い：人はなぜ時空を超えて似たようなテーマで歌を作るのか。 ものの見方の違いはどのような原因から生じるのか。		
評価のための課題と評価規準		
総括的評価：現代の歌詞と和歌の比較分析のプレゼンテーション（A分析 B構成 D言語の使用）		
ATL		
情報リテラシースキル：自分の選んだ歌詞と共通点をもつ和歌を見つける。 批判的思考スキル：自分の選んだ歌詞と和歌の共通点と相違点を見つけ、分析する。		
学習者像		
探究する人：自分の身近な素材とずっと昔に詠まれた和歌を比較することで、その違いがどこからくるのかを考える。		
学習指導要領との関連		
〔思考力、判断力、表現力等〕 【A 話すこと・聞くこと】 (1)イ 比較分析を発表する時にスライドに書く意見の根拠を明確にしてまとめる。 【B 書くこと】 (1)ウ 分析する時の根拠を明確にして、自分の考えたことを説得的に書く。		

2 ユニットのねらい

本単元では、J-POPなどの現在流行している歌の歌詞と古典の和歌を比較します。これにより現代の歌詞と1000年近く昔に歌われた和歌の、時代を超えた共通点、同時に相違点の発見を促します。そしてそこから生徒が自分たちの生きている時代や古典の時代の「ものの見方」を探究することをねらいとします。

1つ前の単元は『『月』にまつわるお話』というトピックでした。「月」を素材にした作品——『竹取物語』、百人一首の「月」を素材にした和歌、「月」にまつわる各国のおとぎ話など——を読んで「月」はどのように描かれているのかを、それぞれの作品に即しながら考えました。そこで生徒は「月」は共通の「アイテム」としてその時代や場所の価値観を反映して描かれていることを学んでいました。アイテムとは歌詞の中に繰り返し出てくる「月」や「花」といったテーマにつながる要素のことを指します。通常「モチーフ」という言葉を使いますが、中学1年生向けに分かりやすくしました。この1つ前の単元で学んだことをいかすように本単元を設計しました。

本単元の一番難しいところは、比較による相違点の発見から、なぜその相違が生まれるのかの原因を「ものの見方」から捉え、またそれについて時代背景を通して考えるところです。当然、和歌が詠まれた時代や自分たちの暮らしている時代のことを相対化する視点も必要になります。

生徒たちにとって自分たちが普段聞いている歌の歌詞と昔の和歌の関連性を発見することは、素材への親しみやすさをもたらすし、古典の和歌をより身近なものとして捉える機会になります。それは同時に時空間を超えたつながりを意識させることにもなります。一方で相違点を考えることは時代性を考察することですが、これは古代と同時に現代の日本も意識することができ、グローバルな文脈とのつながりを考えさせます。

基本的に授業では比較分析の作業が中心になります。また、比較作業のための作品の読み取りとテーマの分析にも力を入れます。それらの作業をふまえて自分たちの選んだ歌詞と和歌の比較分析についてのプレゼンテーションを総括的評価の評価資料とします。

3 学習プロセス

1次	1時	授業の導入、単元の説明、評価課題の説明、ATLスキル、学習者像の確認
	2～4時	教師が指示した現代の歌詞の分析
	5～7時	自分で選んだ歌詞を分析する。
	8～11時	和歌について知る（和歌に触れる、和歌を鑑賞してみる）。

2次	12~19時	現代の歌詞と和歌の比較作業（下調べ）ループリックの確認
	20~21時	スライドづくり
3次	22~24時	プレゼンテーション
	25~26時	全体の振り返り

4 授業の様子

(1)導入

授業の最初はトピックの説明から入り、授業の内容と流れを簡単に説明します。その時にこの単元で扱う概念や、評価課題、身につけていくATLスキルについて確認をします。

今回、重要概念が「ものの見方」なので、生徒の「ものの見方」という言葉の例文を見せながら、今の段階での言葉の理解を確認しました。また探究テーマの中に出てくるグローバルな文脈に関わる「その時代・場所」については、今回は日本の古代の和歌と現代の歌詞を扱うことも説明しました。探究テーマの紹介はするのですが、この時点では軽く触れる程度であまり深く説明したり考えさせたりしません。授業の中で生徒たちが作業を通して理解していくことを目標とします。

また、最後にこの単元での理解度をはかる総括的評価として何をするのか、そこでみるのはどういう点なのか（評価規準）を確認します。ATLスキルについてはこれから行う作業の説明の時にそこで伸ばしていくスキルとして一緒に説明をします。

授業では毎時間5分程度「振り返り」をして、「何をしたか」「何を理解したか、気づいたか」「分からないことは何か」などを問い、次の時間に全体にフィードバックをしました。これは生徒に学習を振り返らせることを意図していますが、生徒の理解度や疑問を確認するのも役立ちます。この振り返りではATLスキルのうちのどのスキルをどの場面で使ったかの確認もしました。

(2)現代の歌詞の分析

まず、教師が提示した瑛太の『香水』と秦基博の『ひまわりの約束』の歌詞分析をしました。歌詞は「詩」の範疇に入りますが、今回はあまり細かくレトリックに触れないでとにかくどんな内容を読み取れるかをみんなで確認しながら、「1. どのような内容か説明する。2. どのようなテーマか一文で書く。3. そのテーマに関わるアイテムはどのようなものが使われているか（事実的問い）を書き出す。」をグループに分かれて考えてもらいました。これは歌詞のメッセージ性に気づいてもらうことも意図しています。この作業の振り返りでは「自分の選んだ曲に意味があることに気づいた。」という感想も見られました。『香水』では、「僕」は彼女のことが今でも好きなのかどうか、『ひまわりの約束』は友情なのか恋愛なのかで意見が分かれて議論になっていました。

(3)自分で選んだ歌を分析する

次のステップとして、生徒が選んだ歌詞の解釈をします。教材としてはストーリー性があるもの、テーマが分かりやすいものの方がよいです。生徒の聞いている歌詞の中にはテーマを捉えるのが難しいものもありますから、生徒から扱いたい歌詞をアンケートでとり、その中からテーマやアイテムが分かりやすいもの、ストーリー性があるものを教師が選びました。作品は『ビターチョコデコレーション』『ドラゴンフライ』『ドライフラワー』『上を向いて歩こう』『舞い散る花』などでした。「作品に使われるアイテムは、どのような働きをしているのか」（概念的問い）という問いを投げかけ、これらの歌詞の解釈やアイテムの分析をグループワークで行いました。

歌詞では言葉が省略されており、なんとなくの意味はとれるけれどはっきりした文脈が分かりにくいものもあります。そこで、文章にして分かりやすく歌詞を書き直すように促しました。これによって生徒の歌詞の解釈がはっきりし、分析の土台ができました。どのように書くのかについて生徒には右のように教師が作ったサンプルを示しました（瑛人の『香水』使用）。この作業の振り返りでは、一人の生徒は「現代の歌詞の解釈をはじめにしっかりとすることが大切だと気づいた。」と述べていました。

瑛人『香水』の歌詞の一部

（説明）夜中に急に別れた彼女から「いつ空いてるの」ってLINEをもらった。君とはもう3年くらいあっていないのに急にどうしたの？って思う。

歌詞を分かりやすく説明する

(4)古典の和歌は「うた」だった

今回は古典の和歌に取り組みます。始めに、1000年近く前の和歌は「うた」であるという点を強調して確認しました。

和歌は朗詠されるもの、歌われるものだった、という話をしたあと、YouTubeを使って天皇家の新春歌会の和歌の朗詠、与謝野晶子の肉声の和歌読み上げなどを聴かせました。また実際に山部赤人の「富士山を望む歌」をみんなで一緒に読み、5, 7, 5, 7……5, 7, 7の長歌のリズムを味わいました。これは生徒が普段聞いている歌と同様、和歌も歌会などで歌われるものであったことを知ることで親しみやすく感じてもらうことを意図しました。

(5)古典の和歌の鑑賞

次に、和歌の背景知識を学んだ上で鑑賞していきます。

最初に、平安時代という時代の特徴として、国風文化の台頭やひらがなの発明などを資料集から確認し、どのような時に和歌が詠まれていたのかといった当時の風俗を含めて教師が講義します。また『古今和歌集』仮名序を読むことで、当時の人の和歌への考えを学びました。

その後、和歌を実際に解釈していきます。一人一首担当を決めて、資料集に載っている『古今和歌集』の有名な和歌を読み、現代語訳と比較しながら、その内容について考えていきます。テーマに関わるアイテムにはどのようなものがあるかを問い（事実的問い）、その和歌のテ

マと、そのテーマに関係しているアイテムを考えてもらいました。

生徒の振り返りから出てきた気づきとして「和歌のアイテムでは、自然の表現を使ったアイテムが多い。」というものがありました。また表現に対して「和歌では昔の日本特有の言葉を使って書いているので理解するのに少し困難でしたが、理解をすると昔の日本人は表現力が豊かで例えかたがとても上手なことがわかりました。」といった記述も見られました。

(6)現代の歌詞と古典の和歌を比較する～下調べ段階～

i 和歌と歌詞選び

いよいよ比較の作業に入っていきます。作業時間は8時間ほどです。まず、生徒がどの歌詞や和歌を選ぶかに迷ってしまう場合に備え、(5)での生徒の気づきをもとに、百人一首によく出てくる「自然」に関わるアイテムとして「月」「花」「恋」などをピックアップしました。これらを使っている現代の歌詞を教師の方でいくつか出し、それに関わる和歌を見つけるよう指示しました。和歌は『小倉百人一首』のプリントを配りました。また、ネットで古典和歌を探してもよいので自分で見つけてみるように促しました。だいたいの生徒は好きな歌詞をすぐに選び、共通するアイテムかテーマがある和歌を選ぶ作業に入っていました。

ii 共通点を探す

まず共通点を探します。比較分析は共通点を軸にして考えることが大切なので共通点に関する2つの選び方を示しました。1つは共通のアイテムに着目した選び方と、もう1つは同じテーマに着目した選び方です。相違点を考える際に、前者の場合は、例えば「月」ならば「月」に託された思いの違いや、描かれ方の違いなどに注目して分析していきます。後者の場合は、同じテーマならばどんな違うアイテムを使ってそのテーマを表現しているのかを分析します。

ここからは各自の作業に入っていきます。教師は、生徒の進捗状況をみながら、足場架けとして適宜フィードバックを与え、そこから出てくる生徒の躓きや気づきを見て全体に対する指導も調整していきます(形成的評価・差異化)。この段階では生徒の様々な疑問や気づきが出てきます。振り返りに出てくる内容や授業での質問から出てきたものは、その都度、全体に共有していきました。例えば作業中、生徒から「歌詞と和歌の繋がりはとても大きいことがわかった」という振り返りの記述がありました。それを次の授業で全体に共有しながら、「どうして現代の歌詞と和歌はつながりがあると思う？」(議論的問い)と問いかけをしてみます。そうするとある生徒から「気づいていないけれど文化的な言葉のつながりがあるから」という答えが出てきました。そのディスカッションを受けて、ある生徒は振り返りで「時代が変わっても伝えたいことは変わらない」と書いていました。

歌詞は自分で決められるけれど、和歌を見つけるのに苦労している生徒が多かったので、教師がサポートに入りました。ネットでいろいろ調べて「和歌がこんなにある」と数の多さに驚く生徒もいました。最終的に、生徒たちは万葉集から新古今和歌集の和歌まで幅広く選んでいました。

iii 和歌の知識を学ぶ

だんだん作業が進んでくると、解釈で和歌の知識が必要になってくることもあり、「掛詞」「歌枕」「序詞」の説明をして和歌の理解を深めていきます。また、アイテムにあたるものが、歌ことばである場合は、歌ことばの辞典を引いてそのことばが和歌の伝統の中でどのような意味で詠まれてきたのかを確かめます。百人一首の和歌である場合は『百人一首解剖図鑑』などを見せて、詠まれた背景事情についての理解を促します。これは(5)の段階の講義でも教師が説明しましたが、自分で実際に和歌を解釈する時に得る知識は探究で得た知識となります。「恋」の和歌の場合は通い婚などの当時の風俗も紹介します。ある生徒は「似たような内容のものも多少の違いや表現方法や背景の表し方などが違う。例えば和歌の場合は通い婚のため男性を待つ描写があるが、現在では、男性が彼女にフラれたなど、女性が優位(?)に立つような描写がある。」といった気づきを振り返りで書いていました。

iv スライドづくりと評価の事前確認

下調べができた次はスライドづくりです。今回はオンライン授業と対面授業がまざった時期に授業をしたので、プレゼンテーションはスライドを作って説明する形にしました。評価規準Aは「2つの作品の共通点と相違点について述べられており、その違いから分かる当時の人の考え方、現代の私たちの考え方にも適切に言及する」、評価規準Bは「説明する内容を分かりやすいレイアウトで示し、説明の補助の資料も入れられている」、評価規準Dは「聴き手を意識して工夫した明確な説明ができています」といったことを、達成目標として示しました。

(7)プレゼンテーションと成果物

プレゼンテーションは、スライドで説明する形式にしました。生徒1は、紀貫之「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」とSEVENTEENの『舞い落ちる花びら』を比べました。生徒の考えた共通のアイテムは「花」、考えた共通のテーマは「切なさ」と「幸せな一瞬が永遠になってほしい」でした。これはテーマとアイテムが両方共通していた例です。それぞれの作品の中でのアイテムの働きは「2つとも花の美しさと短い花の生涯、散ってしまう哀愁を使って自分の感情を表現している」と分析していました。

また生徒1は2つの作品の相違点は表現の仕方にあることに着目し、そこにももの見方の違いが表れていると考えました。それぞれの表現の特徴として、紀貫之の和歌は「花が散るのを客観的に見ている人間の視点/五七五七七という31文字に表現を閉じ込めている/ノンフィク

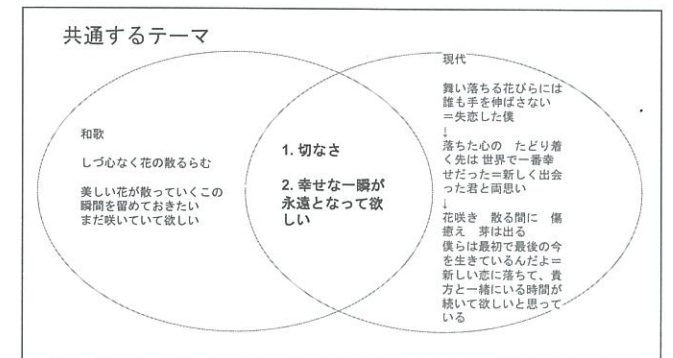


図1 スライド 生徒作品

ション」であると分析し、歌詞については「自分を花にたとえている／歌詞に指定のルールなどが無い／フィクション／時代につれて想像力の豊かさも発展したから同じテーマでもものの見方が異なってくる」と分析していました。このように表現の形式の違いにも言及しながら、現代の歌詞の方がより自由に想像力豊かに「花」というアイテムを使っていることを指摘していました。これらは「時代」による「変化」に関わりがあると述べながら、最後のまとめでは「国や時代を超えても、歌を聞けばその時と同じ気持ちになれると同時に表現方法が時代によって変わってくる。平安時代はビルやインターネットがないため、自然がより身近である。」と、とりまく環境の違いから「ものの見方」の違いが表れることを指摘していました。

生徒2は閑院の「先立たぬ悔いの八千度悲しきは流るる水のかへり来ぬなり」とn-bunaの『言って。』とを比べ、共通のテーマを「親しい人がなくなってしまった悲しみと後悔」と考えていました。テーマに結びつく大切なアイテムとして、和歌は「流るる水」、歌詞は「牡丹の花と夏」をあげていました。同じテーマの場合は違うアイテムがどう使われているかを考えます。これらのアイテムは、和歌では「流るる水のように死んだ人はもとに戻らない」ともとに戻らない深い後悔を表すのに対して、歌詞では「牡丹の花と夏」というアイテムが表す「逝ってしまった君の思い出は残り続ける」という内容が「希望」を表しており、アイテムの働きが真逆であることを指摘していました。この「後悔」についてのものの見方の違いが出てくる原因として、和歌は「一人の作者が自分の思いを素直に伝えてそれを歌にしたもの」であるためこのような「少し暗め」の内容になっているのに対して、歌詞が「多くの聴衆に聞かせるために作った歌」であるため「希望」をもたせる内容になっている、と文化的背景と結びつけて考察していました。

(8)最後の振り返り

探究テーマの理解は、比較分析の中での生徒たちの考察に見られましたが、最後にプレゼンテーションが終わったあとの振り返りで議論的問いを使ってさらに発展的に考えてもらいました。この時はオンライン授業だったので、事前に提出してもらっていた議論的問いに対する答えをGoogleドキュメントで掲示しました。そこに各自コメントを入れていくサイレント・ディスカッションという形で質疑応答をしました。

「人はなぜ時空を超えて似たようなテーマで歌を作るのか」という議論的問いに対しては「昔の歌があるからこそ、今の人に受け継がれている。だからテーマが同じになることがある。」という答えがあり、それを讀んだ生徒が「この文を讀んだ後によく考えると、世の中はアレンジで溢れているのかもしれないと思いました。現代の人々は昔の人々のテーマを受け継ぐだけでなく、インスパイアしてアレンジを加えているからこそ、良いテーマを作り続けることができるのではないのかと思います、とても納得しました。」とコメントをしていました。他には「時代や場所などそれらが違っていても人間の感情がそれらを超えても変わらないから。」「自分の身の回りで起きたことや自分の感情を歌にしているから。」といった答えもあり、議論

が盛り上がりました。

「ものの見方の違いはどのような原因から生じるのか」という議論的問いに対しては「ものの見方の違いは聞き手のテーマに対するイメージや日常で使うものの違いが関係していると思います。」というコメントがありました。また他には「環境、人柄」「性別、時代」と単語で原因をあげた生徒もいました。

そして最後に、この単元の重要概念であった「ものの見方」についてJamboardを使って、自分の言葉で説明してもらいました。「人それぞれの考え方や受け取り方」「その物に対してどう感じるか、どうとらえるかだと思ふ。一つのリンゴを見ても、最初の着眼点がそれぞれ違うようにどんな作品を見てもそれぞれ違う見方がある。それが物の見方だと考える。」「その人から見えるものの世界観や価値観のこと」といったものがありました。それぞれの具体的な作業から、1つの言葉に対するものの見方が形成されてい

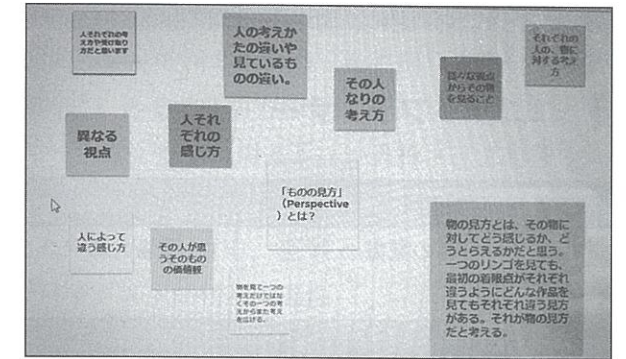


図2 「ものの見方」についての記述

5 振り返りと学びの広がり

今回の比較分析という作業は、比較するものの特徴を浮き彫りにする効果がありました。それは「テーマを表現するために作者が選択したアイテムには、その時代・場所の人々のものの見方が反映されている」という探究テーマの理解へとつながり、さらに広がっていきました。

生徒たちは、古典の和歌と現代の歌詞との比較を試みることを通して、古典の和歌の表現の特徴や背景についての知識を用いて、自分たちが普段聞いている歌の歌詞の特徴やその背景を深く考察し、新たな発見をしていました。例えば、現代の歌詞の意味内容の解釈から歌詞のメッセージ性に気づくことで、自然とその背景にある意図を考え始めていました。その意図を、歌手やグループのバックグラウンドのコンテキストと結びつけて考える生徒もいる一方、現代の歌詞は多くの人に向けて歌うものだからこのようなメッセージになったという伝達の形態の効果として考える生徒もいました。K-POPの日本語の歌詞を分析した生徒は、韓国と日本の文化の共通性とその違いについて考えていました。このような1つの発見を起点として、さらに大きな視点から次の発見へと結びついていく様子は古典の和歌の分析にも見られました。

こうして探究テーマの理解を通して、古典から現代へ、そして世界へと、身近なものからだんだん広がっていく学びの転移を生徒は経験できたのではないかと考えています。

(矢田 純子)